

# 総合学科の特色ある科目学習を生かした進路指導

## —筑波大学附属坂戸高校の事例から—

農業科 高柳真人・工業科 大平典男

### 1. はじめに

平成6年度より、全国の高等学校に総合学科が設置された。総合学科とは、「普通教育及び専門教育を選択履修を旨として総合的に施す学科であり、高等学校教育の一層の個性化・多様化を推進するため、普通科・専門学科に並ぶ新たな学科として設けられたものである」（文部省、1993）。総合学科の教育の特色としては、「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視すること」及び、「生徒の個性を生かした主体的な学習を通して学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすること」が挙げられている（文部省、1993）。特に、前者の特色を実現させるために、「在学中に自己の進路への自覚を深めさせる動機となるような科目を開設する」ことが一つの方策として示されている（文部省、1993）。また、後者の実現に関しては、「教育課程編成に当たっては幅広く選択科目を開設し、生徒の個性を生かした主体的な選択や実践的・体験的な学習を重視し、多様な能力・適性等に対応した柔軟な教育を行うことができるようにすること」が、その方策として示されている（文部省、1993）。要約すれば、総合学科の特色は、進路指導の重視と、多様な生徒に応じた選択科目の開設ということであり、同時に、こうした特色が総合学科の存在意義となっていると考えられる。

進路指導が、単なる学校紹介や職業斡旋ではなく、生徒の自己実現を目指した生き方の指導であるという認識が共通のものになってきているが、進路指導の具体的な方策については、現在も検討が加えられ、事例が積み重ねられつつあるというのが現状であろう。普通科、専門学科、総合学科といった学科の種別を問わずに展開される進路指導の進め方についても、今後、大いに検討が進められるべきであると考えられるが、本研究では、特に、進路指導を重視する総合学科のシステムを生かした進路指導の進め方についての方策を検討することを目的とする。「進路への自覚を深めさせるような科目」としては、総合学科の原則履修科目として開設される『産業社会と人間』や『課題研究』の時間を活用することが考えられる。それとともに、これら2つの科目以外の、総合学科のもう一つの特色である、「多様な生徒に応じて開設さ

れる特色ある選択科目」を活用した進路指導の進め方も可能なのではないかというのが、この研究の背景にある問題意識である。特に、平成6年度より総合学科を設置した、筑波大学附属坂戸高等学校における実践を事例として、そこで開設されている選択科目の特色や、生徒の受け取り方等についての全校的な調査（概要後述）の結果をもとに、「特色ある科目」の進路指導に対する役割について検討を加えることとする。

### 2. 筑波大学附属坂戸高等学校の特色ある選択科目

平成10年度の総合学科開設校は、全国で107校にのぼっている。これら総合学科は、一口に総合学科といっても、学校により開設する専門科目が異なるため、普通高校的な色彩を有する学校もあれば、専門高校的な色彩を有する学校まで、幅広いタイプが揃っている。例えば、開設する専門科目が、芸術やスポーツ、語学、郷土文化などを中心とした学校もあれば、生物生産や環境科学に関する科目を数多く開設している農業高校的な学校もある。総合学科に改変する前は、普通高校だった学校、専門高校だった学校、学科併設校や新設された学校などその前身は様々であり、それぞれの学校の伝統も踏まえて総合学科となったケースも多いので、その教育課程にも多様性が示されているのである。

筑波大学附属坂戸高等学校は、長い間、農業科、機械科、家政科、生活科からなる職業教育を施す高校であり、総合学科に改変する直前は、生物資源、機械科学、家政科学、国際産業の4科を有していた。従って、こうした背景を生かした総合学科作りが進められ、その選択科目としては、「小論文演習」、「数学演習」、「野外活動」、「身近かな科学」、「世界の思想」、「オーラルコミュニケーション」等の普通科目の他、生物生産や環境科学に関する科目、機械技術やメカトロニクスに関する科目、食物・調理や被服・アパレル、保育、福祉に関する科目、国際流通やビジネスに関する科目などが幅広く開設されている。さまざまな職業に関する科目を用意し、その履修を通じて、職業の世界を知ることや、自己の進路について考える機会を用意することをねらったものであるということができると思われる。

### 3. 授業を活用した進路指導

現行学習指導要領（1989）には「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」として、「生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」と書かれているように、高等学校における進路指導は、あらゆる教職員が、全生徒を対象にして、学校の教育活動全体を通じて行うものであることがうたわれている。とはいえ、実際の進路指導の進め方としては、進路指導部と学級担任の連携のもと、HR活動や、講話、職場見学などの学校行事等を展開の場として実施することが多いというのが実際のところであろう。

教科指導の展開の場としての授業では、知識や技能の教授・学習が中心であると考えられるが、そこに進路指導の視点をつけ加えることができるのではないかということが考えられる。高柳（1993、1998 a）は、専門教科の実習内容が、実際の産業現場で行われている仕事と同様の内容を持っていることに着目し、農産加工品を製造する「食品製造」の指導内容に、原料生産や販売・流通に関する学習を結び付け、製造の知識や技術の習得に加えて、農業という産業そのものを理解させる試みを行った。その結果、多くの生徒が、産業としての農業を理解したという調査結果が得られている。このように、授業の中でも、進路先の理解、自己の適性の確認など、進路決定に結びつく指導が可能になるのではないかと考えられるのである。

総合学科においては、特色ある専門科目を選択することが既に進路決定のための自己吟味の意味を持っている。すなわち、「将来栄養士になりたいと考える生徒は、食物調理系の科目や受験に必要な科目を中心に選択することができるし、事務系の職業に就くことを考えている生徒であれば、簿記や情報処理の科目を中心に選択することができる。生徒は、時間割を作る過程で、自分が希望する進路に必要な科目は何か、自分の興味、適性は何かということを真剣に考えざるを得ない。生徒にとっては困難な課題であるかもしれないが、自分の生き方を考え、自己決定を行うよい機会になっている」（高柳、1998 b）と考えられる。この点について、高柳が実施した調査でも（概要後述）、約8割の生徒が、科目選択が将来の進路を考えることにつながっていると回答している（図1）。

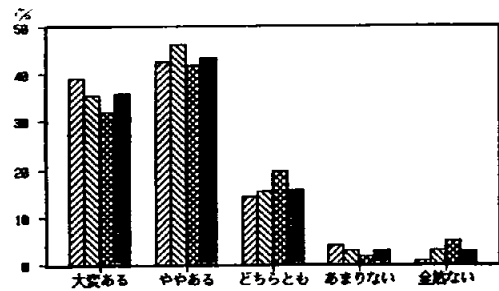


図1 科目選択と進路の関係

また、自分で選択した科目についても、職業世界の理解を図るような配慮がなされている場合が少なくない。例えば、「保育」の授業では、保育園実習を行うが、この体験を通じて生徒は、幼児への関わり方などを体験的に学ぶことができるが、それと同時に、保育という職業の実際を目にすることが出来るのである。かわいいと思って眺めるだけの子供好きなのか、世話をすることも含めた子供好きなのかといった、自己理解を深めるチャンスにもなっている。こうした経験は、例えば、「調理」の授業で、社会人講師の授業を受けた時でも、包丁さばきとともに、料理業界の話や、料理人として伸びる人伸びない人の話を聞いたり、給料や料理の厳しさ、楽しさなどを直接聞くこともできることになる。生物工学の授業では、企業や大学がどのような研究を行っているかという情報が提供されるのである。普通教科においても、教科担当者の卒業研究の話や、高校の英語教育と大学の英文科の授業の違い、高校の数学と大学の数学科の授業の違いなどの情報が与えられれば、進学を希望する生徒にとっても、学問の世界や学部、学科のイメージが掴みやすくなるであろう。中には、従来、雑談として片づけられてきた内容もあるかも知れないが、授業において伝達される知識や技能の役割や意味付けを与えるものとして、こうした進路に関する情報が提供されることにも意義があると思われる。

こうした観点から、筑波大学附属坂戸高校における各授業について、どのような進路情報が提供されているのか、また、それらの情報が提供されることが、生徒の進路意識の向上や進路決定の促進などといった進路指導にどの程度役に立っているのか調査することにした。

### 4. 授業における進路情報の提供

#### (1) 調査の概要

平成10年10月3日（土）前期終業式の日と、10月12日（月）後期授業開始日を利用して、筑波大学附属坂戸高校の全校生徒を対象とした「総合学科の進路指導に関する

る調査」を行った。回収率は、90.8%（404/468）であった。調査利用できる時間が限られていたので、実施日当日に得られた回答だけを分析の対象とした。9割以上の回答が得られたので、かなりの程度、傾向を掴むことができると考えられる。

調査内容は、授業における進路情報の提供と進路指導との関係に関する項目以外のものもあるが、その分析は、別の機会にゆずることとする。本研究での分析に用いた調査項目は次に示した通りである。

## 総合学科の進路指導に関する調査

農業科・進路指導部 高柳 真人

この調査は、総合学科の特色を生かした進路指導の進め方を考えるための基礎資料を得るために行われます。結果は、統計的に処理され、個々の回答者に迷惑をかけることはありません。総合学科で学んだ経験をもとに、調査にご協力ください。

- ① 自分の時間を作るため、どの科目を選択するかを考えることは、将来の進路考えることにつながっていますか。
- ア. たいへんつながっている      イ. ややつながっている      ウ. どちらともいえない  
エ. あまりつながっていない      オ. 全然つながりがない

※この結果は、図1に示した。

- ② 「産業社会と人間」以外の授業で、職業の世界や学問の世界にふれることができた例があったら書いて下さい。

(例) ・「保育」で、保育園に行き、保育の仕事の実際を見ることができた。  
・高校で学ぶ数学と大学の数学科で学ぶ数学の違いについて話を聞いた  
・実習することがそのまま、実社会で行われている仕事につながっている 等

(自由記述欄) ※結果は、表1に示した。

- ③ 授業で職業の世界や学問の世界にふれた人は、それが進路を考える上で役に立ちましたか。当てはまる記号に丸を付けてください。

ア. 進路を決定する上で役に立った      イ. 進路を考える上で役に立った      ウ. ある程度役に立った  
エ. あまり役立たなかった      オ. 全く役に立たなかった

※結果は図2に示した。

- ④ 科目「産業社会と人間」は、進路を考える上で役に立ちましたか。

ア. とても役に立った      イ. やや役に立った      ウ. どちらとも言えない  
エ. あまり役に立たない      オ. 全く役に立たない

※結果は、図3に示した。

表1 授業で職業の世界や学問の世界にふれること

2年生35(25.4%)、3年生25(20.5%)の回答があった。「産業社会と人間」の授業体験と思われる回答や、授業外の体験に関する回答も見られたが、回答例を以下に挙げる。

- ・「飼育実践」で、実際に家畜にふれて学習できた(2, 3年)
- ・「飼育実践」では、筑波大学でも牛の勉強ができた(2年)
- ・「課題研究」での職場見学(3年)
- ・「保育」で、保育園に行き、保育の仕事に実際を見ることができた(2年)
- ・幼稚園に行って、子供と実際に遊んだ(3年)
- ・「生物工学基礎」で、目に見えない小さい世界を知った。小さいものでも、役に立っていることが分かった(3年)
- ・「ビジネス実践」は、本当の会社で働いている感じなので、とても勉強になった(3年)
- ・「ビジネス実践」は、今までの簿記などの商業科目をフルに活用し、実社会(主に事務系)の大変さを知ることができた(3年)
- ・「流通経済」で、新聞や株を実際に使っていて、現在の状況などもやっている(2年)
- ・「調理」で、いろいろな食材にふれることができる(3年)
- ・土いじりで農業の楽しさみたいなのを知った(2年)
- ・農業の大変さが分かった(2年)
- ・畑作業の大変さと喜び(3年)
- ・機械実習で、機械の危険さを実感した(2年)
- ・「身近な科学」で、普通の授業でやらない実験をやって面白かった(2年)
- ・レポート等の厳しさ(3年)
- ・課外活動(部活動)で、大学の部活動に参加したことが、自分の進路などをめ役に立った(3年)
- ・大学の公開講座に出て、大学では実習をたくさんやることを知った(3年)
- ・自分の興味以外の職業についても多く学べたと思う。また、実習はその仕事の一部で、実際にはもっともっと大変なことをしているのだろうと思った(2年)
- ・授業での実習で行ったことが、社会でも、仕事として行われている(3年)

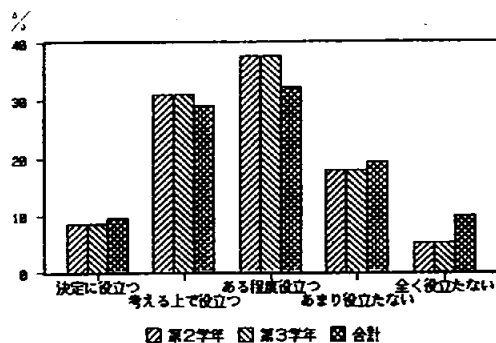


図2 授業での情報提供と進路

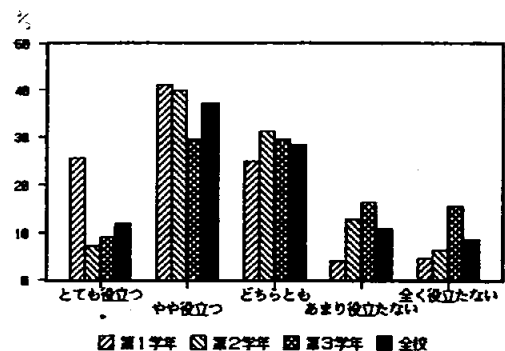


図3 「産業社会と人間」と進路

## (2) 調査の結果

### 1) 授業で職業や学問の世界にふれる機会

調査項目2の自由記述による回答を、表1に示した。1年生は、前期が終了したばかりなのと、履修科目数がまだ少ないため、調査から除外した。回答率は、2年生が25.4%、3年生が20.5%であった。すなわち、2年生

の4人に1人、3年生の5人に1人は、授業で何らかの進路に関する情報を得ていることが確認された。中には、明らかに「産業社会と人間」での体験を書いている生徒もおり、それらは、回答からは除外した。ここに挙げた例の中にも、そうした回答が2、3混じっているかもしれないが、特定できないものについては、回答に含める

こととした。また、公開講座や大学の部活動への参加も、教師引率による活動であるので、学習の一形態とみなして、この中に含めた。

ところで、各授業で、職業の世界や学問の世界にふれた経験を持つ生徒は、ここに示された数字以上に存在すると思われる(例えば、「保育」の授業を受講している生徒は多数いるので、保育の仕事を実際にみた生徒は、もっとたくさんいると考えられる)が、保育という職業を学ぶということよりも、実際に自分が幼児と関わった記憶が強く残っている等といったことも考えられるであろう。そうしたことも考慮に入れて考える必要はあろう。ここで示された4人に1人、或いは、5人に1人という数字が大きいものなのかどうかにはわかには判断できないが、授業の中で、将来の進路につながる可能性のある世界にふれることのできた生徒が一定数いるとよいと思われる。また、職業や学問の世界にふれる体験とは、別の言い方をすれば、進路の情報が提供されることといいかえられるであろう。こうした情報が提供される科目としては、専門科目の占める割合が高かった。

## 2) 授業における進路情報と進路指導

調査項目3の結果を図2に示した。これも、2、3年生のみの回答である。授業で職業や学問の世界にふれたことが進路を考える上で役に立つと答えた生徒は、合計で約7割存在した。その内訳は「決定に役に立つ」が約1割、「進路を考える上で役に立つ」が約3割、「ある程度役に立つ」が約3割である。授業で与えられた進路情報が、生徒の進路決定に重要な役割を果たしていることが示唆された。

調査項目4は「産業社会と人間」が進路を考える上でどの程度役に立ったかを調査したものである。その結果は図3に示されるように「とても役に立つ」(約1割)と「やや役に立つ」(約4割)を合わせた、ほぼ半数の生徒が進路を考える上で役立っていると考えていることになる。調査項目3の結果では、授業で進路情報役に立ったという回答が7割であり、「産業社会と人間」単独で調査した結果よりも高い数値を示しており、「産業社会と人間」以外の科目においても、役に立つ進路情報が提供されていると考えてよいことを示唆していると思われる。

## 5. 終わりに

生徒が学校で過ごす時間のことを考えてみると、授業を受けている時間が圧倒的に多いことがわかる。もちろん授業は、知識や技能の伝達の間として重要な役割を果

たしていることは論をまたない。その授業を行いながら進路指導につながる方策はないものかというのが本研究の出発点であったが、授業に進路情報が取り入れられている事例がみられること、また、そうした授業が生徒の進路検討を促進し得る可能性があることが示唆された。授業で、職業の世界や学問の世界についてふれることは、進路指導に役に立つだけでなく、学ぶことの意味を伝える役割もありそうである。但し、その点については、今後の検討課題になるであろう。

今回、2割強の生徒が「産業社会と人間」以外の授業で進路情報を得ていると考えているが、もしかすると、より多くの生徒が進路情報にはふれているかもしれないという可能性がある。この点については、知識や技能以外にも授業から得られる情報があるということを生徒に意識させる方策を検討する必要があること、また、それができれば、より多くの生徒が、進路決定を検討する機会が増えることを意味していると思われる。今後も、様々な視点から、総合学科の特色を生かした進路指導の進め方を検討したいと考えている。

## 引用文献

- 文部省 1993 『「産業社会と人間」指導資料』 ぎょうせい PP.5-6
- 文部省 1989 『高等学校学習指導要領(平成元年3月)』 大蔵省印刷局 P.8
- 高柳真人 1993 「職業意識を育てる実習指導～『食品製造』を例にして」 久保田旺・高柳真人・清水聖 「学習効果を高めるための実習指導のあり方に関する調査研究」 筑波大学学校教育紀要 vol.15 p.39
- 高柳真人 1998a 「高等学校農業教育における総合的学習の試み」 平成9年度日本教育大学協会研究集会発表論文・全体討議要旨 平成9年度日本教育大学協会研究集会実行委員会 p.23
- 高柳真人 1998b 「総合学科の進路指導」 国分康孝(編集代表)・中野良顯・加勇田修士・吉田隆江編 『学級担任のための育てるカウンセリング全書10育てるカウンセリングが学級を変える[高等学校編]』 図書文化 p.100